

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.147

多摩風土記（八王子隕石）

文化十四年（一八一七）十一月二十二日の暮れ八つ時（午後一時から同三時頃）に八王子市域に隕石が落下した。『新八王子市史』（八王子市）は、千人同心組頭塩野適齋の『桑都日記』等をもとに「雷のような大きな音がして石が落ちてきた。（略）この石は小門宿、上柵田村原宿、大和田村、柚木村、日野本郷（日野市）の五か所に落ちた」と記す。（健介）



俳句と縄文文化との邂逅試論

— 北海道・北東北縄文遺跡群の世界遺産登録に思う —

夏目 重美

縄文遺跡の世界遺産登録

令和三年七月、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が正式に世界遺産一覧表に記載された。縄文の名称は、この時代の土器に施された縄目文様に由来する。世界年表的には新石器時代とほぼ重なる。山田康弘によれば、日本の縄文時代はおおよそ一万六五〇〇年前頃から二三五〇年前頃までの期間をいう。草創期（五〇〇〇年間）・早期（四五〇〇年間）・前期（一五三〇年間）・中期（四四二〇年間）・後期（一二〇〇年間）・晩期（八七〇年間）の六期に区分される。縄文時代は縄文海進の進行した時期でもあり、海と陸との変化に人々の生業もこれに適

応して変化した。

縄文時代は無文字社会である。日々の生業は自然の移ろいと共にあり、恵みへの歓喜と災厄への恐怖、生死を司る未知のものへの畏怖と祈りに導かれた口伝の文化である。有文字社会の到来は、圧倒的規模とスピードによって無文字社会を併呑し、空白化をもたらした。考古学による各種遺構・遺物の発掘は、この時代に生きた人々の生業の様相を僅かずつ明るみに出しつつある。無文字社会は、文字記録を有しないのみならず、音や映像の記録も残されていない。発掘によって眼前に現れた遺構・遺物と真摯に向き合い、人知の蓄積したあらゆる分野から接近し、分析科学の更なる発展を待ちながら丹念に立証を積み重ねて行く以外、その姿を目の当たりに引き寄せることは出来ない。

俳句文芸と縄文文化の接触

美術家はアルタミラの洞窟壁画や縄文土偶の創造的価値に着目する。俳句が広く文芸における創造的世界の一翼に位置するとすれば、たとえ俳句が有文字社会の所産であったとしても、

極限まで文字情報を切り詰めた十七音の周延に、無文字社会の無限を連想することもまた必然である。俳句は捨象化された文字情報の項辭をなすものであり、そこから時空間に広がる創造的世界は無限である。俳句には季語がある。季語は自然と人間の生業の中に蓄積され、凝縮された言葉の宝石である。季語を集大成した歳時記は宝石箱である。俳人宮坂静生は、この宝石箱に地理学の「地貌」を取り込み珠玉の季語を収蔵している。

考古学者小林達雄の着眼・提唱した「縄文カレンダー」は特筆に値する。各地の縄文博物館や資料館を訪ねると、地域の季節に応じた動植物が春夏秋冬に分類、展示されている。縄文時代の四季の生業を地域ごとに理解する格好の手段となる。山田昌久は、木の考古学から実験考古学の手法を丹念に積み重ね、縄文の技術・道具・生活様式の具体的復原に傾注している。

俳句文芸と縄文文化との接触を議論する際、その方法的基礎として哲学の存在を無視出来ない。九鬼周造は、「いき」の構造から、偶然性、実存、文芸論へと論を展開する。また、オギュスタン・ベルグの風土、木岡伸夫の「邂逅」の論理は、異文化もしくは異分野間の接続を図る哲学的原点を提供する。そこで用いられる「通態」概念は、主観と客観、文化と自然、集団と個人といった一見矛盾する概念の深層にある連続性を呼び寄せる。「通態」はまた、瞬間・瞬間と場所・場所の景観の位相をも受入れる。時の経過による連続性と不連続性とを容認し、多様な地域社会の尊厳と周縁の広域社会との相互依存と相互尊重の関係を不易なるものとして位置づける。

俳人と縄文との邂逅

小平雪人は、信州考古学界並びに俳句界の重鎮である。

凍解や石鏃拾ふ桑林

畝打や縄文土器を膝の上

宮坂英式（尖石縄文考古館初代館長）は、雪人から俳句の指導を受けていた縁で、伏見宮博英王殿下の発掘調査を補佐した。茅野市立泉野小学校の句碑に次の一句が刻まれている。

年那れし此の樹この石皆暖き 英一

宮坂静生は、句集『噴井』において縄文の火焰土器や井戸尻遺跡の土偶との邂逅を詠んでいる。

春の日や良寛さまは火焰土器

蛇を戴く土偶水葱の花

金箱戈止夫は、函館市著保内野遺跡から発掘された中空土偶（茅空土偶）との邂逅を詠んだ。

木の根明く中空土偶まろやかに

茅空の欠けし腕にて春を抱く

有馬朗人は、縄文の火焰土器、土偶、貝塚の民との邂逅を詠んだ。同時に豊富な国外体験から、外国詠に独自の境地を開き、国境を越える「ハイク」の可能性を主唱した。

白鳥の帰り行く日や火焰土器

膝立つる土偶に月の出でにけり

文字のなき民の貝塚後の月

地貌の深層に迫る宮坂静生、国境という辺境を打破しようとする有馬朗人、二人の俳人の目指す高みは、まさに本稿の主題

と密に関わり、過去から未来への時空間上に矛盾なく並存する。

発掘された遺構・遺物の実相に迫る二つの科学的曙光に触れて結びとする。一つは核DNA解析による日本列島人(ヤポネシアン)の解析である。斎藤成也の下、その源流についての科学的検証が進行している。今一つは、酸素同位体比年輪年代法の精緻化と年縞博物館の研究成果である。年縞博物館は、福井県三方郡若狭町鳥浜の縄文ロマンパーク内にあり、若狭三方縄文博物館と近接している。四十五メートルに及ぶ七万年の「ものさし」、年縞ステンドグラスの展示を主体とし、研究成果の説明パネルや模型展示を備えている。体験型学習施設としてのみならず研究施設としての役割も有している。

合掌の土偶の肩や初明り 重美

〈参考文献〉(五十音順)

- ・有馬朗人(二〇一七)『句集黙示』KADOKAWA。
- ・伊藤隆夫・山田昌久(二〇一二)『木の考古学』海青社。
- ・遠藤邦彦他(二〇二二)『縄文海進——海と陸の変遷と人々の適応』富山房インターナショナル。
- ・岡本太郎(一九八八)『原色の呪文』文藝春秋。
- ・オギユスタン・ベルク木岡伸夫訳(二〇一九)『風土学は何のため』関西大学出版部。
- ・オギユスタン・ベルク篠田勝英訳(一九八八)『風土の日本——自然と文化の通感』筑摩書房。
- ・川田順造(一九九二)『口頭伝承論』河出書房新社。
- ・金箱戈止夫(二〇一三)『句集北の縄文土偶』角川書店。
- ・クロード・レヴィ・ストロース大橋保夫訳(一九七六)『野性の思考』みすず書房。
- ・木岡伸夫(二〇一七)『邂逅の論理——〈縁〉の結ぶ世界へ』春秋社。
- ・九鬼周造①(一九三〇)『いき』の構造』岩波書店。

・九鬼周造②(一九三五)『偶然性の問題』岩波書店。

・九鬼周造③(一九三九)『人間と実存』岩波書店。

・九鬼周造④(一九四一)『文藝論』岩波書店。

・小島秀彰(二〇一六)『島浜貝塚』同成社。

・小平鼎編纂(一九七六)『小平雪人』甲陽書房。

・小林達雄(一九九六)『縄文人の世界』朝日選書。

・斎藤成也①(二〇〇七)『ゲノム進化学入門』共立出版。

・斎藤成也②(二〇一七)『核DNAでたどる日本人の源流』河出書房。

・世界遺産北海道・北東北の縄文遺跡群 (<https://jomon-japan.jp/>)

二〇二三年六月一日アクセス。なお事務局から各種配付資料を戴いた。

・茅野市尖石縄文考古館公式ホームページ (<https://www.city.chino.lg.jp/site/togataishi/>)

二〇二三年六月一日アクセス。

・中川毅(二〇一五)『時を刻む湖——7万枚の地層に挑んだ科学者たち』岩波書店。

・福井県年縞博物館公式ホームページ (<http://vave-museum.pref.fukui.jp/>)

二〇二三年六月一日アクセス。

・宮坂静生①(二〇〇三)『俳句地貌論——21世紀の俳句へ——』本阿弥書店。

・宮坂静生②(二〇一六)『噴井』花神社。

・宮坂英式(一九六八)『尖石』學生社。

・山田昌久・藤森照信(二〇二二)『対談縄文人の知恵』東京都江戸東京博物館編『東京に生きた縄文人』TOTTO出版所収。

なお江戸東京博物館をとおして「関東地方縄文海進と貝塚分布」のデータ提供を受けた。

・山田康弘(二〇一九)『縄文時代の歴史』講談社。

この他、各博物館等の学芸員諸氏の懇切なご厚意とご指導を受けた。

ここに深甚なる謝意を表する。

本稿は、二〇二三年二月二五日、東京多摩地区現代俳句協会定例研究会における報告を加筆・割愛したものである。

追 研究会当日の朝、めくった日めくりの一句：

寺山修司と訛り同じく蜆汁 武田伸一

宇多喜代子監修(二〇二三)『俳句の日めくりカレンダー』季語から知る日本の四季の美しき』暦生活。

完

あけぼの集

原書並ぶ牧野の書斎額の花 八王子 青木 隆
 いづくにや父の魂魄^{こんぱく}梅雨の星 東久留米 青村 萌生
 うつくしく裸は土にのこらない 八王子 赤野 四羽
 菜を刻む手もと明るき五月かな 国分寺 秋山ふみ子
 朝刊のビニール仕立て菜種梅雨多 摩 足立喜美子
 Jアラート恍惚として茎立菜小 平安達 昌代
 要するに他力本願独活の花 清 瀬 穴原 達治
 手品師の涼し気な目に騙される 稲 城 新井 温子
 一夏の暑気乗越えむ梅仕事 八王子 荒川勢津子
 炎昼やヤナカミナマタフクシマよ 町 田 有坂 花野
 海月に降るマリンスノーやミサイルや 国分寺 安西 篤
 梅雨冷えやじつと動かぬ弥次郎兵衛 足 立 飯田 和子
 メモしたメモ忘れ来し梅雨の街 東久留米 飯田 玉記
 夢に見しと亡夫の友人沙羅の花 多 摩 石川 春兎
 夫婦という漸近線や半夏生 小 平 石橋いろり
 階段の一段ごとの暑さかな 練 馬 石原 俊彦
 蛩舞う思い出せない父の声 八王子 市川 春蘭
 麦の秋農継ぐ人のなき生家 青 梅 一ノ瀬順子

保育園の遅延証明枇杷たわわ 狛 江 伊東 類
 虹二重半跣思惟像立ち上る 町 田 稲吉 豊
 ユネスコが求める富士の登山線 町 田 今田 述
 梨の花チャットGPTに詠えるか 武蔵野 内田 牧人
 葭切や川より低く人住める 武蔵野 江中 真弓
 戦争に注意 白線の内側へ 府 中 大井 恒行
 大見得を切ってみただけ振れ花 日 野 大槻 正茂
 湿りたる木道踏めば遠郭公 八王子 大谷みどり
 旧友は田舎のバアチャン赤とんぼ 立 川 大友 恭子
 白玉のつるんと新しい人生 川 崎 大西 恵
 子燕や戸籍甲州軒の下 三 鷹 大森 敦夫
 にかい小麦ミサイル、戦車過^よぎりし 野 昭 島 岡崎たかね
 薔薇園のたしかあの辺アンネが居た 武蔵野 岡崎 万寿
 青嵐人間椅子に節の穴 三 鷹 小川 葉子
 山猫の立ち去りし方へ花の闇 飯 塚 奥野 亜美
 こもれびや蛩袋の咲く谷に 川 崎 尾崎 太郎
 万緑に農夫溶け入り畑仕事 昭 島 尾関 英正
 昼寝覚め一期一会の青 豊 青 梅 小野こうふう

あけぼの集

囲まれて小さな不安向日葵畑 稲 城門野ミキ子
 カッコー啼き掟のような木がいつぱん 西東京 金谷サダ子
 あてもなき旅券更新夏の雲 日 野亀津ひのとり
 母のようコロン一滴枕元 西東京 河 順子
 やがて静かに宇宙へ寒い五月立 川川島 一夫
 蛩と雪舞う言語野はケロイド大 田川名つぎお
 樟若葉ブロッコリーめく長崎港 調 布菅 さだを
 紫陽花や花いちもんめ女の子 清 瀬神崎 幸子
 火柱の芯は骨色 八月来小 平城内 明子
 丸い背で金魚を愛でる母 八十大 田小泉満智子
 走り梅雨野太き声の群れ 鳥三 鷹高坂 栄子
 朝曇り猫のひとみはペイズリー 西東京 幸村 睦子
 ミニトマトころがる朝のJアラート 府 中小林 育子
 人新世後退はせぬ 蝸牛町 田小山 健介
 遊べやあそべ地球の原っぱ 太平洋立 川今野 修三
 家族会議全員一致仔猫飼う 多 摩 齊田 仁
 宅配の歩み近づく網戸かな 昭 島坂本 空
 薔薇の卓空気のような夫でした 東久留米 佐々木克子

ふる里の水に潤う青田かな 府 中笹木 弘
 薄暑光灯台目指すたらひ舟 府 中佐藤 栄子
 枝の先啼くか唄ふか蝸牛 調 布佐藤 茉
 竹藪に人声のする七月来 昭 島佐藤 光子
 座禅する心の気づき今朝の秋 八王子 柴れいこ
 三面鏡ひらけばどつと木の芽吹く 杉 並島 彩可
 焼き茄子はしょみんのキャビア 世界賛足 利清水 弘一
 桜桃忌身過ぎ世過ぎに書を書いて 小 平下田 峰雄
 梅雨入りや胸に傷ある青い鳥 調 布白戸 麻奈
 一通のメールに平和くづれ 炎ゆ 世田谷 鈴木 浮葉
 此の路地の軒なみ一人山笑う 立 川鈴木かずえ
 吊革に疲れを預け初夏の旅 小 平鈴木 寿江
 蜥蜴去るイヴの裏切り深い闇 小金井 鈴木 佑子
 痛さとはいのちの証し 夏の下痢町 田栖村 舞
 童子仏の芯まで濡らす青葉 雨板 橋諏訪部典子
 病室の玻璃に若葉の未来あり 小 平関 梓
 幸福度の低い国ですカタツムリ 調 布芹沢 愛子
 夏めくや足元にある「停止線」 小 平高瀬多佳子

あけぼの集

空よりも海の匂いの渡り蝶 武蔵野 高野 公一
 春の星ひとつ美し誕生日 西東京 高原 桐
 夏潮の地球が丸く見える丘 清 瀬谷村 鯛夢
 台紙だけ残るアルバム夏の風 国分寺 玉井 豊
 梅雨なれど女坂ゆかず男坂 稲 城 玉木 康博
 風の押すからだ地獄の釜の蓋 日 野 玉木 祐
 とむらひの銀河鉄道夕化粧 三 鷹 田山 光起
 蟻の列いけるとこまで行くつもり 武蔵野 津久井紀代
 海濁る空濁るそして俺も 八王子 辻 升人
 梅雨晴れ間どうするどうする老いの道 八王子 都筑 遊
 ひまわりが好きで磊落わが長子 東村山 寺尾 令子
 袋蜘蛛火宅の裏へ廻りけり 立 川 遠山 陽子
 徹頭徹尾平和主義です蝸牛 西東京 戸川 晟
 ガラス器に自由気ままなさくらんぼ 杉 並 飛永百合子
 栄螺から変な男と言われそう 清 瀬 永井 潮
 点滅はやさしき言葉螢の夜 西東京 中田とも子
 大荒れの一ひかりなりけり信長忌 国 立 中野 淑子
 夏立つや標本箱の蝶そよぐ 府 中 中矢 温

白無垢の遠き昔や桜貝座 間 長野 保代
 湖の底出づや天竜夏の潮 武蔵野 夏目 重美
 大蟻の蹴とばしてゆく蟻の道 町 田 成戸 寿彦
 あぢさゐの藍極まれり多佳子の忌 国分寺 南行ひかる
 縹色に暮るる母郷や河鹿笛 西東京 西川 五月
 無愛想な人ばかり増え濃紫陽花 世田谷 西前 千恵
 東北に火事のつづけるアカザかな 昭 島 西村 智治
 四葩咲いてA Iと睨めっこ 多 摩 拔山 裕子
 新茶汲み八十路の日々を味わいし 三 鷹 根岸 敏三
 いっただつて女は強し姫女苑 三 鷹 根岸 操
 計の知らせ人づてに聞く蝸牛 小 平 野口 佐稔
 バナナ船邦人校碑に見送られ 八王子 野澤 勝美
 発電機唸り夜店のモダン焼 羽 村 野島 正則
 すずらんのような幸せまだ未来 青 梅 萩原 芙沙
 ひまわりの咲くも雨降るサポリー 江 武蔵野 蓮見 順子
 ただいまでもどりました八月の空耳 武蔵野 蓮見 徳郎
 河骨の一步も退かぬ背丈かな 多 摩 平山 道子
 炎天や出アフリカの世界史を 八王子 広井 和之

あけぼの集

修司忌やニートばかりの劇団員調 布藤原はる美
 老鷲に故人なからん西の方練 馬淵田 芥門
 大江健三郎なく憲法記念の日八王子冬木 喬
 母の日の疵がついてる紙風船羽 村堀部 節子
 百日紅歩けばついてくる孤立国 立前田 弘
 赤とんぼもう一度だけ振り向いて 国立前田 光枝
 陶枕に氷を入れて祖母吐息 木更津 松本 まり
 泉湧く勇氣・詩心・猜疑心 八王子 松元 峯子
 ギトギトの恋がお終い遠花火 東久留米 三池 泉
 あじさいの寺にあなたと行つたよね 東久留米 三池しみず
 百合の芽と日増しに伸びる世の不安 東久留米 三浦 禎三
 三年の思ひを乗せて帰省船 小金井 三浦 土火
 余生なお余白にあらず麦の秋 世田谷 三浦 文子
 受けて立つ覚悟どれ程アマリス町 田 三木 冬子
 遠郭公石仏の耳人の墓国分寺水落 清子
 韭白く咲きぬれば夜の広がりぬ 三 鷹 水野 星間
 トリアノンまで新緑の奥へ奥へ日 野 満田 光生
 夏草に呼びとめられているようだ 昭 島 宮腰 秀子
 新茶汲む手鏡ほどに身近な人調 布 宮崎 斗士

更衣余生一年減りにけり 国分寺 武藤 幹
 向日葵の消すに消せない水平線 小金井 村井 一枝
 泡ひとつ金魚の言葉聞きもらす 熱 海 望月 哲土
 大地への讃歌のごとく薯の花 東村山 森本由美子
 地球儀の中まで花冷えでありぬ 三 鷹 守谷 茂泰
 泰山木なかなか効かない痛み止め 町 田 山崎せつ子
 夏つばめ小児病棟昼灯す 東村山 山崎美紗緒
 時の日の寿命まかせの昼寝かな 府 中 山本 徳子
 凌霄やタンクトップにピンヒール 八王子 山本ひまわり
 アロハ着て浮き浮き出掛ける子孫達 多 摩 山本みつし
 夏至の日のゆっくり暮れて空の鳥調 布 豊 宣光
 水に雲日傘の中の水明り 稲 城 好井 由江
 風吹けばわれも水面に麦の秋 三 鷹 吉川 真実
 麦秋や牛の蹄を磨ぐ男 府 中 吉澤 利枝
 獄中の俳人窓の緑詠む 東久留米 吉平たもつ
 悼むとは忘れざること端居して 国立 立 吉村春風子
 人々を飲み干す駅や蟻地獄町 田 米倉 信山
 ベランダ打つ雨音膝に本と猫立 川 米澤 久子
 墓洗う父と母との背中から 青 梅 渡部 洋一

青木 隆
巻貝に宙のひびきや菜の花忌

高野 公一

菜の花忌は司馬遼太郎さんの忌日。

巻き貝に宙のひびきとは旅を続け、その土地毎にさまざまな人々に出会い作品に纏めた司馬さんの姿を思うのか、あるいは混迷する世界に希望を見出したという作者自身の思いを示すものなのか。

青村 萌生

八十も生きて空っぽ目刺焼く

渡部 洋一

人生百年のうち八十も生きて、その中に残したものは空っぽで味気ない人生であったと謙遜した一句です。然し乍ら、誰でもそんな気持を持つことは当り前のことで今更後悔しても後の祭りであり、最後の季語に共感を覚えます。

秋山ふみ子

梅三分西洋館は水の色

小山 健介

春まだ浅き頃の情景が美しく簡潔に描写されています。『西洋館は水の色』と表現することで、「水の色」が「梅三分」にも響き合い、静謐な趣を醸し出しています。シンプルな構成なのにとっても味わいのある一句でした。

安西 篤

山手線二周の家出春の月

好井 由江

或る日、ささいな静いから意地になって家を飛び出してしまふ。とはいえ、他に行く宛もなく、山手線を二周して春の月を見ているうちに、ようやく気持も治まって来たのだが、さて家へはどんな顔して帰ったものか。小さな「父帰る」的一幕。

飯田 玉記

山手線二周の家出春の月

好井 由江

家出人が子供なのか老人なのか分らないが、要は日頃の少々の不満を家出して家族に心配して欲しかったのではないか。短かい時間ではあったが家族の驚きと心配を知り得て家出の目的を果たせた何とも愛らしい句ではないでしょうか、私は好きです。

石川 春兎

嫁ぐ子の窓ひろびろと豆はやす

安達 昌代

娘の嫁ぐ日が近づいた春の日の一、引越しのための準備を母子で始めた。窓をひろびろと開け放せば、春風が通り抜ける。その窓際には、豆苗の芽が伸びている。これからの人生に幸多かれと願う母親の気持ちの詰まった祝句である。

石橋いろり

梅一輪いのちの電話つながる夜

南行ひかる

相談員だった友人が、リストカットを重ねる少女に自分の電話番号を渡した。その後泣きながら電話をかけてきた少女に思い止まらせる事ができたと言う。猿之助事件以来、人とのつながりの重要性が謳われた。梅一輪の季語の持つ力。つながるがいい。

石原 俊彦

寂しさも編み込んでをり毛糸玉

藤原はる美

寒い冬の夜、一人で無心に編み物をしている時、ふと自分を置いて先に逝ってしまった人のことを思い出し、急に寂しさが募って無性に会いたくなり、暫く手が止まってしまった、ということだろうか。「寂しさも編み込んで」がいいですね。

宇賀いせを

山手線二周の家出春の月

好井 由江

山手線に乗る。目的は無い。入れ替わり立ち上り、また座るそれらの人々の動きがとて面白。駄々をこねる児、居眠りをする老人、おしゃべりに夢中になっている女学生等々。人間模様が面白い。暇になったら山手線に乗ってみて！

白壁の甲斐の集落山眠る

内田 牧人

鈴木かずえ

自論として俳句は修辭する事ですすが修辭は想像の世界へ導けるのか？掲句は明らかに純嘯目説明句、然し乍ら惹かれました。甲州路の四季は日本の原風景です。嘯目と言葉が合致すれば素直に物語に入っている、と反省しました。清涼感！

岡崎 万寿

春風にのり飛べぬ折鶴の黙

松元 峯子

ヒロシマ・サミットで注目を集めた禊子の千羽鶴。だがその核廃絶の声は首脳たちの胸に届いたのだろうか。「折鶴の黙」の表現は被爆者たちの無念の心情に通じるもの。無批判なメディアの「春風」にのれるものではないと。批評性をもつ詩情に共鳴。

小川 葉子

荒ぶっているけど君はシャボン玉

玉井 豊

荒ぶって発射されるミサイル、無人有人戦闘機。荒ぶってほしい人を血に染める。「ちよつと待て、君はシャボン玉。脆いが夢そのものだ。」かつて石鹼液は手作りされ、歌われ吹かれた。吹かずに振って飛ばされる現代。風々吹くな、石鹼玉飛ばそ。

春愁やパズル一つが解けぬまま

尾関 英正

吉村春風子

季語とその後の具体的なパズルの話がうまくマッチし、如何にも春らしいアンニュイな気持ちがよく表されている。パズルが一つ解けなくても何の差障りもないでしょうが、何だかすっきりしない。春ならではの物憂い気持ちが上手く詠まれています。

尾崎 太郎

八十も生きて空っぽ目刺焼く

渡部 洋一

「空っぽ」が響きました。この言葉には寂しさとともに、何かしら明るさを感じます。飄々として日々の暮らしを過ごしていくという生き方がいいなあと思います。夕暮れに七輪の前にはやがて目刺しを焼いている、少し昔風な景色が目につかびます。

川島 一夫

人違いされて街角春近し

門野ミキ子

「人違い」の句は類想が多くなりやすいので詠みにくい句といえる。それをさらっと表現した。しかし「街角」が効いている。街角には年令を問わず夢がある。しかも「春近し」でそんなに悪い気も起きなかった気がする。素直な上手さでしよう。

何億年眠ればよいか詩語の春

川名つぎお

大井 恒行

書き起こすモチーフを考えれば「眠ればよいか」の日常感は、ついにゴールに達する日はないだろう。中七の和語のやわらかさや下五の春のひびきは無限の祈念を思わせる。詩語の音韻は私語と死後の安寧というやさしみへの相対性を生みながら。

幸村 睦子

寒いねと猫に声かけ嫌われる

平山 道子

猫好きの私には何とも楽しくなる一句です。日なたはつこでくつろいでいた所に声をかけられた。犬ならシッポでも振ってくれたでしょうに。猫も人間とも距離をもって付き合いたいものです。猫にかまれて医者に行った私としては身に沁みました。

小林 育子

古墳から幽かな寢息夜の新樹

城内 明子

遠い昔に埋葬された高貴な人は誰なのだろう。卑弥呼だろうか。その盛り土の中から、寢息が幽かに聞こえてくるようだ。死者の部屋である古墳と、みずみずしい新樹の取り合わせにより、歴史が蘇ってくるように感じられた。

山菜莢や偏頭痛を散らす術
斉田 仁

石橋いろり

永祿三年、織田信長が今川義元を破った桶狭間の戦いの勝因は、信長の偏頭痛だったという逸話がある。雨による激しい頭痛で夜中に目覚め、奇襲を決めたという。赤い山菜莢の実を見ながら、こんな句を作る作者も、また俳句猛者のひとり。

佐々木克子

今日終わるゆつくり落葉踏みしめて

山崎せつ子

しみじみとした句、ああ今日も無事に終わったと安堵したのでしょうか。仕事帰りかしら。忙しかった一日をかみしめながら落葉を踏む音になぐさめられて家路を急ぐ。窓灯りを近くに家人の顔の思いながら。「ゆつくり」とに想いがこもった句でした。

笹木 弘

少年はうまく泣けずに冬の川

三浦 文子

少年は感情を出せずに泣けないのか。冬の川に不幸があったのか？解らないが感じるものがあつた。小学校の頃、泣き虫だった自分。雨が降り、傘を持ってきた母の姿に涙ぐんだ。先生からこの子は感受性が強く涙腺が弱いと書かれ通知表に残っている。

立春や女子大学の最寄駅
佐藤 栄子

石川 春兎

立春ともなれば今迄通っていた大学の卒業が近いだろうか。女子大学生の卒業という男子に比べやはり華やかさが違う。羽織袴に振り袖姿など。就職も決まり卒業後の社会人になる一つの区切りとして、作者自身の思い出の駅が忍ばれた。

柴 れいこ

せせらぎの光の和音猫柳

中野 淑子

待ち遠しい春を迎え切りは光に満ちてきた。せせらぎという「音の和音」につながると思うが、水の流れの反射からか「光の和音」と詠みあげている。猫柳の銀毛と相まって、豊かで繊細な感性が視覚と聴覚に訴えているとてもきれいな一句と思う。

島 彩可

ひこばえに促されているわたし

宮腰 秀子

切株などの根元から新たに生えるひこばえは森が再生する生命力の象徴と云われ、見るものを鼓舞するエネルギーに満ちている。「促されている」とあるが、その声は作者の内なる心の声でもあろう。季語の力が最大限に活かされていることに感服。

寂しさも編み込んでをり毛糸玉
島田 澄子

藤原はる美

暮らしのなか、成長の早い子供のセーターを解き、毛糸玉にして毛糸を足し新しく編む準備をする。楽しい思い出も巣立つ寂しさも籠った毛糸玉を思いうかべます。緑側に転がる毛糸玉は母の思い出の一つです。

下田 峰雄

跨線橋より望む富嶽や太宰の忌

西川 五月

三鷹電車庫近くの中央線に戦前から鉄製の歩道橋があつた。太宰治も時々散歩をしていたが、太宰居宅の近くに住んでいた子供の頃、橋上からの眺めは多摩連山から富士山迄一望出来る雄大な景色の格好の遊び場であつた。なつかしく共感出来る一句。

白戸 麻奈

古墳から幽かな寢息夜の新樹

城内 明子

この句の内の「寢息」はいったい誰のものでしょうか。「古墳」に葬られている貴人の「寢息」でしょうか。それとも「新樹」のほうでしょうか。それとも両方でしょうか。これから盛んになる夏にむかつて、「幽かな寢息」を楽しんでほしいものです。

鈴木 浮葉

山手線二周の家出春の月

好井 由江

今は駅一つ増えたのでどうかわかりませんが、私の十代の頃は山手線一周一時間五分でした。親と喧嘩した時や友人ともう少し話したい時の、山手線ぐるぐるを思い出します。お金もかからず、冬暖かく夏涼しい。二周は二時間ちよつとのプチ家出です。

鈴木 佑子

野うさぎに火葉のにおい弥生尽

安西 篤

ボツと飛びだした野うさぎに火葉のにおいがすると。実際戦争の最中の場所、そして戦の火種があちこちにある現代の世相を暗示する社会性の深い作品と思いました。十七字の短詩型に世相とその怖れを凝縮してよまれたのはさすがと思いました。

鈴木かずえ

ひとりなら先頭でビリ野に遊ぶ

佐藤 実

思いがけない句に出合い自然と顔がほころんで来ました。毎日杖を頼りに歩いている私にピッタリです。「先頭でビリ」に共感しました。これからも美しい自然を満喫し、夕風にあたりながら九十才台を元気で歩くことをモットーに楽しみたいと思います。

関 梓

下萌の大地に戦火幼の瞳^め

下田 峰雄

「下萌」と「幼の瞳」は芽生えたばかりの命で未来を生きる充分な時間が遺されている筈。それが危ういと作者は言う。自然環境の破壊と人間同士の殺戮の記録を十七音で語る作者の力量に敬服し、八十年前戦禍に怯えていた幼い私の記憶が蘇りました。

芹沢 愛子

末枯れて踏み応えなき我が影法師

拔山 裕子

誰もが加齢のため経験する普遍的な感情が描かれ、もどかしさと共に老いの気概も感じられる。「踏み応えなき我が影法師末枯れて」「我が影法師踏み応えなく」と韻律を整え、また季語を替えても別の世界観が描けるのではと。

高野 公一

鳥帰る既読の文字を残すのみ

米倉 信山

渡り鳥が日本列島のどこかで一冬を過ごした事実、作者自身が確かに生きていた過去の時間はもはや目に見えない。それでもそれは確かにあったことだ。「既読の文字」という用語による確かな把握があり、「鳥帰る」の季語の含意を膨らませてくれた。

高原 桐

少年はうまく泣けずに冬の川

三浦 文子

五木寛之氏の言う通り近年人は泣かなくなつた。嬉しくても悲しくても泣いた昔は人情深く、思春期の私は何かにつけてよく泣いた。男子はどうか。「高校三年生」の歌詞には「泣いた日もある」と詠う。冬枯れの様に心が乾いたら、「感動せよ」。

谷村 鯛夢

目に入れてどうにも痛きこどもの日

赤野 四羽

ちなみに私もこの間、双子の孫を両目に入れてみたけれど、まあ、いうほどは痛くなかつたな。四羽さんも、実はそれほど痛くはないが、俳句の連中は「孫俳句は甘い」とか、下らんことを言うのが多いからね。慣用句はこんな風におしゃれに使いたいな。

戸川 晟

少年はうまく泣けずに冬の川

三浦文子

第二反抗期の少年は自意識が高く、表現が素直にできない。笑うも泣くもどこかな。特に泣くことができない。この頃から男になり、男はそれ以後他人に泣き顔は見せない。今は男が男と言うのが難しい時代になったが、これはこれで良いのだと思う。

飛永百合子

老人の歩く速さや冬の川

根岸 敏三

同級生で毎日一万歩を目標に歩いている人がいる。「歩きすぎでは？」と言った覚えがある。無理は禁物。川の流れの速さにもよるが、常にマイペースでゆつくり行きたい。足元の草花が優しく話しかけてくれる。益々佳句に出会いそう。

中野 淑子

あたたかや古きミシンに油注す

長野 保代

「あたたかや」は平穏な日常を表現されたものと受け止めた。昭和、平成、令和と常に生活圏にあり同僚のような足踏みミシンにも疲労の跡が？この辺りで油を注し、復活させよう。作者自身の生き様、気概とも重なり共感して頂いた。

長野 保代

薔薇活けて夫亡き部屋を明るくす

山崎美紗緒

ご主人様のご逝去お悔やみ申し上げます。悲しい時は白色の花に囲まれていらしたのでしょう。今は亡きご主人様の部屋は色とりどりの薔薇が活けられ明るくなられました。遺された奥様大変だったと思います。どうぞお身体大切にお過ごしください。

西野 奏子

ポッキーの箱開く音や春の海

大森 敦夫

ポッキーは細長いチョコレート菓子だが、私はその箱を開ける時の音が好きだ。これから食べるポッキーへの期待やよろこびを噛み締めるような音が好きだ。この句はその気持ち思い出させてくれた。季語「春の海」に感情が託されている。

拔山 裕子

野うさぎに火薬のにおい弥生尽

安西 篤

野兎の群れが疾走してくる。何やら必死の形相。焦げ臭い風が吹いてくる。野焼きの焰に追われたのだろうか。いやこれは火薬の臭いだ。戦争が始まったのだ。間もなくこの草原も火の海となるかも。暗澹たる思いで作者は過ぎし日を想起している今。

根岸 敏三

この戦争終わらないのかもう開花

吉平たもつ

「この戦争」はウクライナを指しているのか、いずれにしても先の太平洋戦争の時幼児であった私は、防空壕の中の暗い思い出がある。わが家は焼夷弾で全焼してしまった。そこに世が生えました。

宮崎 斗士

山手線二周の家出春の月

好井 由江

山手線は一周三十四・五キロ。その所要時間は一時間数分とのこと。二時間余りの家出……。車窓から東京の夜景を、柔らかな春月をぼんやりと眺めつつ、ふと家族たちの顔が浮かんできた主人公だろうか。はつこりと心温まる一句だった。

前田 光枝

老鶯やたつぷり聞いた耳ふたつ

水落 清子

夏にも鳴き続ける鶯のことを老鶯という。年老いた鶯という意味ではない、救われる思いだ。私達の散歩コースの一橋大学の正門にさしかかると毎回必ず鳴き始める。しばらくベンチで、たつぷりと二つの耳で聞き入る。こんな時間はいつまで……。

三浦 土火

人違いされて街角春近し

門野ミキ子

コロナ禍でマスクがすっかり定着し、チョット見ただけでは誰だか判別が困難な世相。うつかり間違うコトも多々あったであらう。私自身通りすがりの女性と家内を間違えた。終いや収束の兆しがみえた？現在、「春近し」がなんととも響く。

宮腰 秀子

こののちは墓守にして桜守

津久井紀代

昔は先祖代々ことに男子の後継が墓守であつたが、近年は少子化により墓守の形態も変つていった。樹木葬もその一つと思う。作者はこれからは桜の木を墓としたのでしよう。亡き人に思いを馳せながら生きていく限り墓守としての作者の決意が見える。

森本由美子

山手線二周の家出春の月

好井 由江

私はプログラマー。今日も超クレイジー。一人の時間が欲しい。夕食後、誰にも告げず家を出て山手線に乗る。一周目、頭を空にして振動に身を任せる。二周目、ビルの合間に月が。正木ゆう子の月。脳みそが機能しはじめる。連絡せよとLINE。

吉村春風子

ポイントにつられ買物日脚のぶ

高坂 栄子

一読同感。カード全盛時代とも言える時の流れである。その場に現金の持ち合わせがなくてもカードがあれば、つついって買ってしまう。そのうえ付与されるポイントの魔力に追い打ちを掛けられ、抑制力を奪われる。通れる特効薬の開発があれば表彰もの。

あけぼの便り

○散策の道には葵の花が咲いています。しばし立ち止まりいろいろな花をながめて心豊かなひと時です。(一ノ瀬順子)

○二年前の秋、四年間の介護の末十八歳の柴犬を亡くした。昨年暮次女と決めた仔犬は人間に譬えれば気の強いじゃじゃ馬。それでも家族に笑いは絶えない。皮膚科の主治医には「長生きをしない。」と言われてしまった。短命家系の私？

○隣々家の飼い猫(ルッシー・8才)は二才の時バリ島で拾われた山猫ですが、行方不明になりました。六年間調教した山猫です。三月初旬に、白血病を発症している」と診断されました。(奥野亜美)

○すっかり年をとってしまふ家の中に引きこもっています。コロナもようやく落ち着きを見せ始めたのに、皆様にお会いできず残念です。(金谷サダ子)

○コロナ禍で中断を余儀なくされた秩父巡礼34ヶ寺の終章を五月末にやっと果たして一段落。さて次は？…。永井潮氏が退院後編集に戻られてご活躍の由、心より

感謝申し上げます。(亀津ひのとり)

○松本まり様、前号で拙句をご鑑賞頂きありがとうございます。梅雨本番になりますがご自愛の程、今後とも宜しくお願い致します。(神崎幸子)

○淵田芥門様、一四六号にて拙句をご講評下さり有難うございました。嬉しく拝読させて頂きました。(城内明子)

○母に勧められお仲間に入れていただきました。今回初めての投稿です。背の丸い母は人生の目標でもあり、自分自身なのでしようか。(小泉満智子)

○走り梅雨のようなこのごろ、たまの晴れの日には有難くせつせと動きます。俳句はそちのけで残念ですが、みどりまたみどりに慰められています。(佐々木克子)

○今年に入ってからデイサービスに週一回お世話になっています。思うように体も動かず、つくづく歳を重ねることの大変さが身に沁みます。気力のみです。(鈴木かずえ)

○亀津ひのとり様、前号の拙句への選評と編集部員への労わりの言葉を頂き有難うございました。今後も「多摩のあけぼの」へのご健筆を期待しております。(関 梓)

○不気味な昨今の世相。あこがれと希望を

なくさぬように努めて美しい句をめざしています。
(高原桐)

○補聴器を購入して一年。まだ慣れぬ違和感のなか、城内様、門野様に拙句を取り上げて戴き大変励みになりました。ありがとうございます。
(玉木祐)

○永井さん、体調はいかがですか？早く元気になるのを願っています。私も蜂窩織炎のあと不調でしたが少しずつ戻っています。
(田山光起)

○いつもお世話になりありがとうございます。「多摩のあけぼの」がいかにも永井さんに頼っているか、この度の事で痛感いたしました。もつとみんなで手分けしないといけませんね。そういう私も思うように体が動かず句会にも出席出来ていません。残念で仕方ありません。
(飛永百合子)

○コロナ禍が収束したら…と夢見ていた旅行ですが、衰えた足腰に四年近い年月の重さを感じる日々です。今は、罹患せずいられたことを感謝するのみ。そして、何といっても作句の楽しみがあったことは大きな救いでした。(中田ともし子)

○夏目重美様、三浦禎三様、前号で拙句「車椅子順路に低き返り花」をご鑑賞いただき有難うございました。昨春秋、六

義園に吟行した時の句ですが、まさか三か月後に自分が車椅子のお世話になるなどとは思ってもみませんでした。

(永井潮)

○いつもお世話になります。膝腰が悪く遠出が出来なくて失礼しております。皆様の俳句を拝見し勇気を頂いております。

(長野保代)

○穴原様、望月様、拙句をご鑑賞頂きましてありがとうございます。また編集後記にて永井様のご苦勞を知り頭の下がる思いです。少し遅れても大丈夫です。リハビリを続けられ、いずれ歩行器のない生活に戻れることを願っています。
(成戸寿彦)

○河順子様、前号で拙句をご鑑賞いただきありがとうございます。夫婦共に膝痛で旅行を控えるようになりました。テレビ体操とリハビリを頑張ります。

(根岸操)

○永井潮さんが編集に復帰されたこと、良かったですね。くれぐれも無理をなさらずご活躍下さい。皆様のご健康をお祈り申し上げます。
(野口佐穂)

○山崎せつ子様、拙句をご鑑賞いただき有難うございました。年毎に出来なくなるが増えて歩行も杖に頼っている昨今

です。どうぞ御身大切にお過ごし下さいませ。
(平山道子)

○当会研究会に初めて出席してひと昔。「帯解くや花の鏡台斜にして」にルビを振った。会場内に大声で叱責あり。「ルビを振るんじゃあない」。その大先輩、暫くお名前見当たらず。梅雨から酷暑への砌、呉々もお大事に。
(淵田芥門)

○コロナ禍が少し落ち着きを見せ世界中の人々が待ちに待った日本への旅行へと押し寄せています。新幹線移動によりはしかやインフルエンザと、抵抗力のない若者や老年に蔓延しているようです。コロナワクチン五回目を考えているところで。体力氣力を骨抜きにされていると思う所があります。編集部の皆様のご無事を祈念申し上げます。
(松本まり)

○お世話になっています。感謝しています。昭和記念公園吟行、楽しかったです。よく歩いたので爆睡しました。

(松元峯子)

○永井潮様、退院おめでとうございます。リハビリ大変だと思いますが早く元氣になり一杯飲みたいと思っています。

(三浦禎三)

○諏訪部典子様、前号で拙句「二十世紀梨齧って私の立ち位置」をご鑑賞頂きあり

がとうございました。嬉しく大切にしたい私の一句となりました。(三木冬子)

○三池泉様、前号で拙句(牡丹雪の句)をご鑑賞頂きとても嬉しかったです。有難うございました。今後ともよろしくお願い申し上げます。(宮腰秀子)

○北海道生まれ育ちの私は俳句を始める前は梅雨時期が大の苦手だったのですが、俳句を始めてからこの季節が好きになりました。紫陽花、十葉など詩情を掻き立てる季語も多く、俳句があつて日々を楽しめるのは幸いなことだと改めて感じております。(吉川真実)

○五月十九日、石橋いろりさんと共に、故依田しず子さん宅へ弔問に伺いました。ご夫君によると、癌が転移されていた由ですが、昨年十二月の俳句研究会にも出席され、僅か二か月後のご逝去。率直で核心を突いたご発言がすばらしかったのに無念の極みです。私の行きつけの小料理屋でも、しず子さんと親しかったという方に会いました。短歌、俳句、合唱と多方面で積極的の活動されていたのと。心よりご冥福をお祈りいたします。

(満田光生)

第3回 俳句研究会

3月25日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 満田光生・秋山ふみ子・

玉木康博・根岸操・大森敦夫・

石原俊彦・根岸敏三

参加者 17名

★講話……吉村春風子氏

「西行の生涯とその歌」

ふらここやゆつくり大人になればいい 飯田 玉記
夕ざくら米炊ける間を歩きたり 根岸 操
砂の城少し崩して春の潮 大森 敦夫
をさな子の高さに舞ふや紋白蝶 秋山ふみ子
落ち椿老いた花びらまだ白き 玉木 康博
風光る薄紅をまたひいてみる 高瀬多佳子
陽炎を出てくる猫と目があえり 佐々木克子
病棟に季節を運ぶ春帽子 石原 俊彦
生きたとは何かに出合う春の野辺 宮腰 秀子
菜の花や野道に午後の日温み 尾崎 太郎
不器用に生きて八十路や郁子の花 吉村春風子
珈琲がぼこぼこ沸いて花に雨 亀津ひのとり
河川敷投げ打ち走り花盛り 青木 隆
青柳や太極拳は湖を向き 満田 光生
「菜種梅雨ですわ」新聞の集金来 西前 千恵
蝙蝠の住処は昔の防空壕 根岸 敏三
蛇穴を出て日光浴を楽しめり 松元 峯子

第4回 俳句研究会

4月29日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 石橋いろり・秋山ふみ子・

玉木康博・根岸操・

大森敦夫・山本ひまわり・

関 梓

参加者 30名

★講話……霧野萬地郎氏

『ミヤンマー遊覧・俳句とともに』

笑みといふ無言の挨拶あたたかし 吉村春風子
葉桜や忘れ上手は生き上手 関 梓
かげろうになった人からたよりくる 佐々木克子
病葉になりたくてなつたんじやない 飯田 玉記
ランドセル三つ砂場は春夕焼 山本ひまわり
体温の中にわれあり目借り時 高野 公一
囁りへバステルカラーのシャツがない 小山 健介
読点のやうにため息春は近く 稲吉 豊
大リーグのベンチに榮える武者兜 戸川 晟
ふらここに異国の母子の弾む声 西前 千恵
花筏につかぬ花びらありにけり 根岸 操
春蟬や急かされてゐる前頭葉 秋山ふみ子
清明や運河をわたる貨車の列 尾崎 太郎
青し寝息よばうばうたる春眠 董 振華
句を持って昭和集まる昭和の日 野口 佐稔

(P19中段に続く)

令和五年度 定時総会・陽春句会

令和五年三月十二日（日）
於・武蔵野スイングホール

コロナ禍もようやく下降きみとなり、花の便りも聞く季節、令和五年度の定時総会と陽春句会が開催されました。「多摩のあけぼの」を斉唱後、満田光生幹事の司会で根岸敏三副会長の開会の言葉で会は始まりました。

吉村春風子会長の主催者挨拶に続き、ご来賓の神奈川県協・尾崎竹詩会長、千葉県協・長井寛副会長からの祝辞を賜りました。お二方からは会歌「多摩のあけぼの」の心を大切に今後も連携してとの温かい言葉を頂きました。

定時総会

議長に石原俊彦、副議長に関梓を選出し議事に入りました。

第1号議案 二〇二二年度事業報告
第2号議案 二〇二二年度収支報告
及び会計監査報告

第3号議案 二〇二二年度事業計画案

第4号議案 二〇二二年度収支予算案

事業の第1号議案と第3号議案については事業部長の石橋いろりが、予算の第

2号議案と第4号議案については経理部長・副幹事長の根岸操が説明を致しました。

以上右の議案が審議され、原案通り、承認、可決されました。

なお第4号議案の予算案の組み立てについて、「昨年までの実績で赤字が続いているが、このままの推移では今後、予算の組み立てに問題が生じるのではないか」と、会員の方からのご指摘を頂きました。

確かにここ数年、コロナ禍の影響もあり研究会・吟行会への参加者数の減少もあります。予算の組み立てについては喫緊の問題として幹事会で検討することになりました。

陽春句会

投句数54句、当日の参加者は36名でした。上位入賞者10名と特別選者の特選句は18頁の通りです。選ばれた方々には会からの賞品と特別選者から特選賞がそれぞれ授与されました。

なお西野奏子さんは多摩地区での最年少の中学3年生で根岸敏三副会長の特選に選ばれたことは喜ばしい結果となりました。

（関 梓記）



総会全員写真



陽春句会入賞の吉村さん（左）と蓮見さん



総会会場

2022年度（令和4年度） 収支決算報告書

1. 収支状況（令和4年1月1日～令和4年12月31日）

		前年度実績	予 算	実 績
収入	本部助成金	356,400	360,000	355,000
	地区会費	88,000	100,000	94,000
	事業収入	225,000	676,000	513,500
	雑収入・寄付	1,008	1,000	1,006
	計	670,408	1,137,000	963,506
支出	事務費	9,309	9,000	14,288
	通信費	51,318	10,000	28,032
	印刷費	34,650	20,000	56,320
	会報費	499,689	500,000	512,415
	会場費	0	5,000	0
	交通補助費	22,500	25,000	30,000
	交際費	23,936	25,000	0
	事業費	277,387	458,000	522,512
	会議費	0	30,000	0
	雑費	3,100	3,000	3,560
	計	921,889	1,085,000	1,167,127
	(*)収支差額	△ 251,481	52,000	△ 203,621

(*) 前期末資金残758,204円（下記2.）に、当期収支差額実績（△203,621円）を加えたものが、当期末資金残554,583円）である。

（備考）当期事業費の収支状況

事業項目	収入	支出	収 支
総 会	40,000	68,155	△28,155
俳句大会	279,000	373,065	△94,065
吟行会	52,000	42,152	9,848
研究会	142,500	39,140	103,360
協会賞なし	0	0	0
計	513,500	522,512	△9,012

2. 資金状況

現金預金内訳	前期末	当期末	増 減
手元現金残高	88,892	0	△8,892
普通預金残高	749,312	554,583	△194,729
定期預金残高	0	0	0
合 計	758,204	554,583	△203,621

2023年 俳句研究会及び行事案内

◆俳句研究会	開催地
第1回 令和5年 1月28日（土）幹事会	立川（子）
第2回 2月25日（土）	立川（子）
第3回 3月25日（土）	立川（子）
第4回 4月29日（土）	立川（子）
第5回 5月13日（土）	立川（子）
第6回 6月17日（土） 武蔵野市かたらいの道入ベース	武蔵野市
第7回 7月22日（土）	立川（子）
第8回 8月26日（土）	立川（子）
第9回 9月9日（土）幹事会	立川（子）
第10回 大会と重なり中止	
第11回 11月25日（土）	未定
第12回 12月12日（土）	未定

午後1時より講師による講話の後句会、合評
開催地の（子）は、立川市子ども未来センター

◆主な行事	
2023年度 定時総会・陽春句会 3月12日（土） 会場 武蔵野スイングホール	武蔵境
初夏の吟行会 5月7日（日）立川昭和記念公園 句会場 花みどり文化センター	立川
秋の吟行会 10月7日（土）江戸東京たてもの園 句会場 小金井市萌え木ホール	武蔵 小金井
第41回 多摩地区俳句大会 10月29日（日） 会場 武蔵野スイングホール	武蔵境
◆会報「多摩のあけぼの」編集発行	
令和5年（1月 4月 7月 10月） 各月の28日頃発送予定	

令和五年度 陽春句会作品

〈入賞十句〉

大根の今日と明日とに切られをり 永井 潮
 ものの芽のひとつ一つにある力 吉村春風子
 陽炎が出迎えに待つ無人駅 蓮見徳郎
 推敲を重ねる一字笹子鳴く 長井 寛
 帰り来てひとりの春の灯をともし 江中真弓
 花の絵のマンホール踏む二月かな 秋山ふみ子
 無心とはただ歩くこと春の尾根 宮腰秀子
 老化とはあの白梅が遠いこと 野口佐稔
 流水やさまざまな声ひびきあふ 根岸 操
 陽炎はもみくちヤスクランブル交差点 飛永百合子

〈以下到着順〉

吾というはるけきものに芒の穂 高野 公一
 日脚伸ぶホントにイヤな季節来る 白戸 麻奈
 コロナ時代だったと五年後の立春に 玉木 康博
 ささやかに夫婦の一品山椒和え 根岸敏三
 教師たりし頃のたしなみ卒業歌 佐々木克子
 過客には素敵なところつくしんば 尾崎竹詩
 介護する側に留まり亀鳴けり 関 梓
 探梅や金銀飛車角香り立つ 石橋いろり
 春の土手忘れていたり世の不安 水落清子
 まどろみの夢は真つ暗西東忌 稲吉 豊

児の拳一挙一動しやばんだま 大森敦夫
 御朱印を待つ青空の紅白梅 夏目重美
 寒林や迷う心を捨てに行く 松元峯子
 三月に生まる良し悪し小糠雨 石原俊彦
 ご飯炊いてわれ九〇の祝とす 川島一夫
 春寒し地球の悲鳴トルコから 青木 隆
 蕎麦がきをつまみに一献梅三分 石川春兎
 ブラヴォーと拍手の嵐龍天に 満田光生
 臘梅や時間が淡く透きとおる 山崎せつ子
 探梅や道ゆづられる車椅子 長野保代
 雪うさぎ眩しき峽を支配する 森本由美子
 春夕焼け探す魔盤サラサーテ 小山健介
 捨てられぬ藤村詩集草萌ゆる 戸川 晟
 座蒲団に猫睡りおり雛の間 蓮見順子
 初雪や轍のずれの許されぬ 広井和之
 恋猫は恋の終りを納得し 三池 泉
 父と娘やボール蹴り合ふ春の園 西前千恵
 黄泉菫の季寄せ枕に朝寝かな 三浦土火
 灯をともし火のように墜つ雪椿 大井恒行
 東京都野線に積む過去未来 高瀬多佳子
 かなしみを身ぬちに込めて櫓明り 水野星閣
 路の臺平和なればのえぐ味かな 武藤 幹
 分からない狂言聴きつ屠蘇祝う 鈴木寿江
 青空に踊る瘤の樹日脚伸ぶ 前田 弘
 道を問う人の真似する黄水仙 前田光枝
 みつあみが四人こしかけ春の暮 西野奏子

〈句会選者の特選句〉

ふぞろいな書棚の孤独春を病む 有坂花野
 路の臺遠回りして捻挫して 山本ひまわり
 安逸に群れる生き方蝌蚪の国 望月哲土
 桜餅ひとつ頬張り海を見る 尾崎太郎
 春一番おしめ横丁吹き抜けて 野澤勝美
 打上がる浜の銀鱗涅槃吹 尾関英正
 梅東風や遠き大地に戦禍の血 南行ひかる
 そつと手をにぎる感触春の恋 清水弘一

尾崎 竹詩 選

陽炎はもみくちヤスクランブル交差点 飛永百合子

長井 寛 選

吾というはるけきものに芒の穂 高野 公一

前田 弘 選

吾というはるけきものに芒の穂 高野 公一

遠山 陽子 選

花の絵のマンホール踏む二月かな 秋山ふみ子

冬木 喬 選

座蒲団に猫睡りおり雛の間 蓮見 順子

三池 泉 選

そつと手をにぎる感触春の恋 清水 弘一

三浦 土火 選

推敲を重ねる一字笹子鳴く 長井 寛

江中 真弓 選

ものの芽のひとつ一つにある力 吉村春風子

高野 公一 選

ご飯炊いてわれ九〇の祝とす 川島 一夫

吉村春風子 選

大根の今日と明日とに切られをり 永井 潮

根岸 敏三 選

みつあみが四人こしかけ春の暮 西野 奏子

山崎せつ子 選

ものの芽のひとつ一つにある力 吉村春風子

戸川 晟 選

大根の今日と明日とに切られをり 永井 潮

小山 健介 選

大根の今日と明日とに切られをり 永井 潮

根岸 操 選

推敲を重ねる 一字笛子鳴く 長井 寛

蓮見 徳郎 選

帰り来てひとりの春の灯をとす 江中 真弓

水野 星闇 選

大根の今日と明日とに切られをり 永井 潮

佐々木克子 選

ものの芽のひとつ一つにある力 吉村春風子

石橋いろり 選

臘梅や時間が淡く透きとおる 山崎せつ子

大森 敦夫 選

帰り来てひとりの春の灯をとす 江中 真弓

(P15より続く)

希望という一歩を胸に新入生 石原 俊彦

テキーラを浴びて暫しの花軍 大森 敦夫

腹出して笑ふ兜太や春の寺 亀津ひのとり

年の豆まかずに一人鬼も来ず 白尾 幸子

団塊の世代もぢばば昭和の日 三浦 土火

蒲公英や我も路傍の石ならむ 淵田 芥門

すみれたんぼ今日は童話を読み聞かせ 松元 峯子

窓枠に治まっている春の色 高瀬多佳子

ビオトープ高層階の蝌蚪の言い分 石橋いろり

今正に田植の頃なりダムの底 辻 升人

学園の林の奥に老鶯鳴く 根岸 敏三

原敬^が像に石割桜散る 青木 隆

春の蠅コーヒールンバを聴いてをり 霧野萬地郎

紫陽花やぐぐんと芽々吹く枯枝に 玉木 康博

馬酔木咲く初摘ダージリン淡苦き 木村 菊

第5回 俳句研究会

5月13日(土) 立川市子ども未来センター

担当幹事 秋山ふみ子・玉木康博・

大森敦夫・石橋いろり・

根岸操・石原俊彦

参加者18名

★講話……林 誠司氏「おくのはそ道」

幸せの逃げる速さやしゃばん玉 吉村春風子

足場組む男の背中薄暑かな 石原 俊彦

軒に紙^しで垂^で神田祭の近き町 尾崎 太郎

振花やなるようにしかならないの 飯田 玉記

蛇口より水の螺旋や夏来る 伊勢 史朗

水くらげほどに空母の進みゆく 林 誠司

柏餅みんな大人になりにけり 大森 敦夫

新茶汲み八十路の日々を味わいし 根岸 敏三

髭剃りが今の生き甲斐初夏の風 戸川 晟

連休後鉛になつてうとうとす 玉木 康博

暮息がみえないヨガの脚 高瀬多佳子

菜を刻む手もと明るき五月かな 秋山ふみ子

象の花子もぬた園の花水木 西前 千恵

バラの香や吾が青春の悔少し 三浦 土火

マスクとり薄暑の空へ手をひろげ 佐々木克子

転びてもすぐ起くる子や風薫る 根岸 操

ジャズ響く芝生広場や夏来る 青木 隆

樹の上で齧る枇杷の実白き雲 石橋いろり

第41回多摩地区俳句大会

日時 10月29日(日) 午後2時より

場所 武蔵野スイングホール

記念講演 大井恒行先生

「高屋窓秋について」

投句締切 9月1日(金) 必着

投句料 二句一組千円(何組でも歓迎)

(六組以上応募の方には賞品贈呈)

皆様お知り合いの方も誘い合わせの上、

多数の応募をお待ちしております。

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。
「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「都多摩」へと進んでください。

★第41回多摩地区俳句大会

日時 令和5年10月29日(日) 午後2時
会場 武蔵野スイングホール
(JR武蔵境駅北口)
二句一組 千円(何組でも歓迎)
締切 令和5年9月1日(金)
(詳細は別紙をご覧ください)

★秋の吟行会

日時 令和5年10月7日(土)
場所 江戸東京たてもの園(小金井公園内)
交通 JR武蔵小金井駅、西武新宿線花小金井駅よりバス
集合 江戸東京たてもの園正面玄関 10時
会場 小金井市商工会館 萌え木ホール 1時より
(詳細は別紙をご覧ください)

★会員の現況(6月末現在)

231名(正会員187名・一般会員44名)
☆新入会員 2名(敬称略) *印は正会員
*小野こうふう(青梅市)
小泉満知子(大田区)

◆多摩地区協会のご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料、それ以外の方は年会費2千円です。お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」 編集担当幹事

関 梓(梓) 満田 光生(光)

飛永百合子(百) 山崎せつ子(せ)

永井 潮(潮)

◇◇◇ご案内◇◇◇

俳句研究会

第8回 8月26日(土) 午後1時

立川市こども未来センター
立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)
電話042・529・8682

第9回

*講話 石川 春鬼氏
9月9日(土) 午後1時
立川市こども未来センター

第10回

(いずれも会費五百円、出句三句)
中止いたします

(俳句大会開催のため)

○感染防止を心掛け、体調不良(発熱等)の場合は積極的にお休みください。お出かけ前の検温とマスクの着用をお願いします。

〈在宅句会〉(投句参加)

▽開催日の一週間前までに投句してください。

▽出句は一人三句です。(選句はありません)

▽20×3cm程の短冊に一句ずつ書いてください。

▽参加費は千円です。(出句時にお送りください)

▽句会終了後、全作品の得点入り清記用紙と高点句、出句された作品の成績、寸評等を取り

ポイントとしてお送りします。

(投句先) 〒180-0006

武蔵野市中町3-29-19

蓮見 徳郎方「俳句研究会」投句係宛

編集後記

☆今年も半年が過ぎた。時間の流れが速いと感じるのは加齢の為か。正確に言えば処理能力の速度が低下したという事だと思う。

☆結社の四十五周年記念号に二つの句会の現況を書き、逝去の句友に思いを馳せた。人生は無常、一回一回の句会を大切にしていきたい。

☆線状降水帯という言葉が最近よく耳にする。地球温暖化が進んで新語も次々に登場する。頭を柔らかくしておかないと入って来ない。(百)

☆新潟まで旅してきました。新幹線に乗るのは久しぶりで、梅雨の晴れ間、螢を見たり、花菖蒲を見たりと大いに楽しみました。(せ)

☆多くの方からお見舞いと励ましの言葉を頂き恐縮しております。いつかはバトンタッチと思

いながらも、他の方々も余裕がない現状で長年過ぎてしまいました。一肌脱いでくださる方を

心待ちしつつ、新しい会報をお届けします。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

令和五年八月一日発行

発行人 吉村春風子

編集人 永井潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015

三鷹市大沢2-10-7

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821

FAX 0422-3010934

印刷所 株式会社 清水工房

TEL 0422-62002626